

## 十和田湖・奥入瀬溪流 観光案内センター

### 十和田湖観光交流センターぷらっと(市)

観光案内のほか、十和田湖ひめす展示、ヒメマスに生涯を捧げた「和井内貞行」、十和田湖の魅力を紹介した「大町桂月」、乙女の像を制作した「高村光太郎」の資料を展示しています。



9:00~17:00

〒018-5501

十和田市大字奥瀬字  
十和田湖休屋486

☎0176-75-1531

※交流室使用は9:00~21:00

### 十和田ビジターセンター(環境省)

十和田湖、奥入瀬溪流、八甲田山の豊かな環境と、そこに育まれるさまざまな生き物との出会いを楽しむことができます。

「夏の十和田」「秋の十和田」「冬の十和田」「十和田湖の自然」「十和田の音風景の1年」などを展示しています。



9:00~16:30

〒018-5501

十和田市大字奥瀬字  
十和田湖休屋486

☎0176-75-1015

### 奥入瀬溪流館(十和田湖ふるさと活性化公社)

#### ▶溪流アシストサイクル“楽チャリ”

レンタル電動自転車を出します。

▷シティサイクル(6段変速)4時間

▷電動アシスト(3段変速)4時間

#### ▶奥入瀬モスボール工房

こけのモスボール(こけ玉)展示・販売のほか、こけ玉作り体験ができます。

#### ▶ネイチャーエクスペリエンスグリーン ハウスツアーデスク(NEx)

▷カナディアンカヌーツアー(十和田湖)

▷ランプリングツアー(ゆったり気ままな散策自然観察)

▷トレッキングツアー(奥入瀬溪流、ブナの森観て歩き)

9:00~17:00

〒034-0301

十和田市大字奥瀬字  
朽久保182

☎0176-70-5977



### ■乙女の像 十和田湖の誘客に寄与

十和田湖では、1912(大正元)年に十和田保勝会(現・財団法人青森県観光事業協会)が動力観光船を運航しました。1934(昭和9)年には青森と和井内間、1935(昭和10)年には和井内と毛馬内間に省営バス(現・JRバス東北)が開通され、八甲田と奥入瀬と十和田湖ルートが開かれています。戦後の復興期である1950(昭和25)年に、青森県知事の津島文治(太宰治の長兄)らによって、観光客誘致のため、国立公園指定15周年を記

念し、十和田湖に記念碑を建立する計画が立てられました。この計画により1953(昭和28)年に完成した記念碑「乙女の像」は、高村光太郎が彫刻を引き受けたもので、一躍十和田湖のシンボルの彫刻として有名になり、また、佐藤春夫作詞の歌謡曲「湖畔の乙女」が全国的に愛唱されたこともあり、「乙女の像」は十和田湖への誘客に大いに寄与しました。

### ■観光客は団体から個人、グループへ移る

紅葉の10月に湖畔・奥入瀬が約6千800台の車の混雑で全路線麻痺したとの記録が

現われるのは1963(昭和38)年。1967(昭和42)年には、滝沢道路の完成により十和田湖が一周できるようになりました。また1965(昭和40)年代、十和田・八甲田が観光事業の成長期となり、観光客が旅館、ホテルには泊まりきれず、民宿が営業を始めます。その後、二度の石油ショックで、観光客の増加は止まりますが、休日道路は現在も混雑しています。

特に、奥入瀬溪流沿いの道路の混雑はひどく、渋滞緩和と植生保護を図るため、1982(昭和57)年から道路整備されていた惣辺(奥入瀬)バイパスが、1997年に開通し、2004年には宇樽部と休屋間の国道103号宇樽部トンネルも貫通し、交通の便が大幅に良くなりました。

十和田八幡平国立公園指定50周年を迎えた1986(昭和61)年は、東北自動車道が全線開通して、翌1987(昭和62)年に青森空港のジェット化、1988(昭和63)年に青函トンネルによる津軽海峡線が開通して、2010年には東北新幹線が新青森駅に到達。2016年3月からは、新青森駅から新函館北斗間の北海道新幹線も開業しました。



この武田知事とともに、十和田湖の発展に尽力したのが、小笠原耕一です。小笠原は、法奥沢村(元・十和田湖町)の村長だった当時、大凶作に見舞われており、その救済事業として、当時の青森大林区署(元・青森営林局)に、十和田道の開削を具申し、焼



小笠原 耕一  
奥瀬、沢田村と  
法奥沢村の合併  
の合併で2代目村長  
な



武田 千代三郎  
内務官僚、教育者。十  
内務官僚、教育者。十  
青森県知事の時、和  
青森県知事の時、和  
和湖開発に尽力

1911(明治44)年、桂月の紀行文を読んだ皇太子嘉仁親王(大正天皇)から、第18代青森県知事・武田千代三郎に、「十和田湖を観光できないか」との御下問がありました。武田知事はさっそく十和田湖を視察し、1912(大正元)年の県議会に、三本木口と黒石口両線の開削費予算を提案し、頑迷な反対派を説得し、十和田湖への道を完成させます。

### ■開発と自然保護の争い

十和田湖の水をめぐっては、和井内貞行のヒメマスに関わる「養魚経営権」以外にも十和田湖を巨大な水がめと見なし、かんがいや発電に利用する「開発計画」と、自然の景観として保護すべきであるという「保護計画」とがぶつ

かっけていました。

奥入瀬川の水を利用して三本木原野を開墾する計画は、すでに江戸時代末期からあり、安政2(1855)年、南部藩士新渡戸傳(新渡戸稲造の祖父)が私財をもって開墾事業を行っていました。

十和田湖が、1934(昭和9)年の第一次および第二次の国立公園指定からもれたのは、1928(昭和3)年に農林省が三本木原開墾事業計画を立てたため、十和田

湖の水利用をめぐって自然保護派と推進派が激しく対立したのが原因でした。

対立は10年にわたりました。が、住民と知識層のねばり強い運動によって、自然保護派が大勢を占め、1936(昭和11)年に国立公園に指定されました。その結果、内務・農林両省の妥協が成立し、翌37(昭和12)年に自然保護、かんがい、発電の両立を図った「奥入瀬川河水統制計画」

が策定されました。しかし、この計画は、日中戦争の勃発と太平洋戦争の開戦によって、大量の水利用計画に変更されず。

戦時体制への突入から事業目的も東北地方の復興策から戦時下の電力供給増強、食料時給制度の強化へと切り替えられました。それにより発電事業は、1939(昭和14)年に立石発電所、1943(昭和18)年に十和田発電所

が完成し、開墾事業についても1944(昭和19)年5月に、稲生川への通水式が行われています。

両事業は戦後も継続されましたが、発電事業は1955(昭和30)年の法量発電所、1961(昭和36)年に蔦発電所の完成によって終了しました。一方、国営開墾事業は1960(昭和35)年に完成し、戦後の地域経済復興に大きな貢献を果たします。

## 乙女の像

高村光太郎・作



対峙する2人の像は、高村光太郎が遊覧船に乗った自分の姿にヒントを得て「自分自身を写す人間の理性」を表現したといわれています。風雪に耐えながら幾千年は、朽ちるまで立つという像の栄華と、十和田湖観光事業の栄華と、将来を無言で見つめています。

現在、過去  
未来も見守っ  
ています



十和田湖の裸像に与う  
高村 光太郎

銅とスズとの合金が建っている。どんな造形が行われようと無機質な円形にはちがいが無い。はらわたや粘液や脂や汗や生きものきたならしさはここにない。すさまじい十和田湖の円錐空間にはまりこんで、天然四元の平手打ちをまともにもうける銅とスズとの合金で出来た女の裸像が二人影と形のように立っている。いさぎよい非情の金属が青くさびて地上に割れてくずれるまでこの原始林の圧力に堪えて立つなら幾千年でも黙って立ってる。

(乙女の像の台座に刻まれた詩より)

十和田湖の観光は、1994年頃をピークに団体客から個人、グループ旅行へ転換し、観光客の減少が見られるようになっています。また、2011年には未曾有の東日本大震災が発生し、観光客の減少に拍車をかけました。